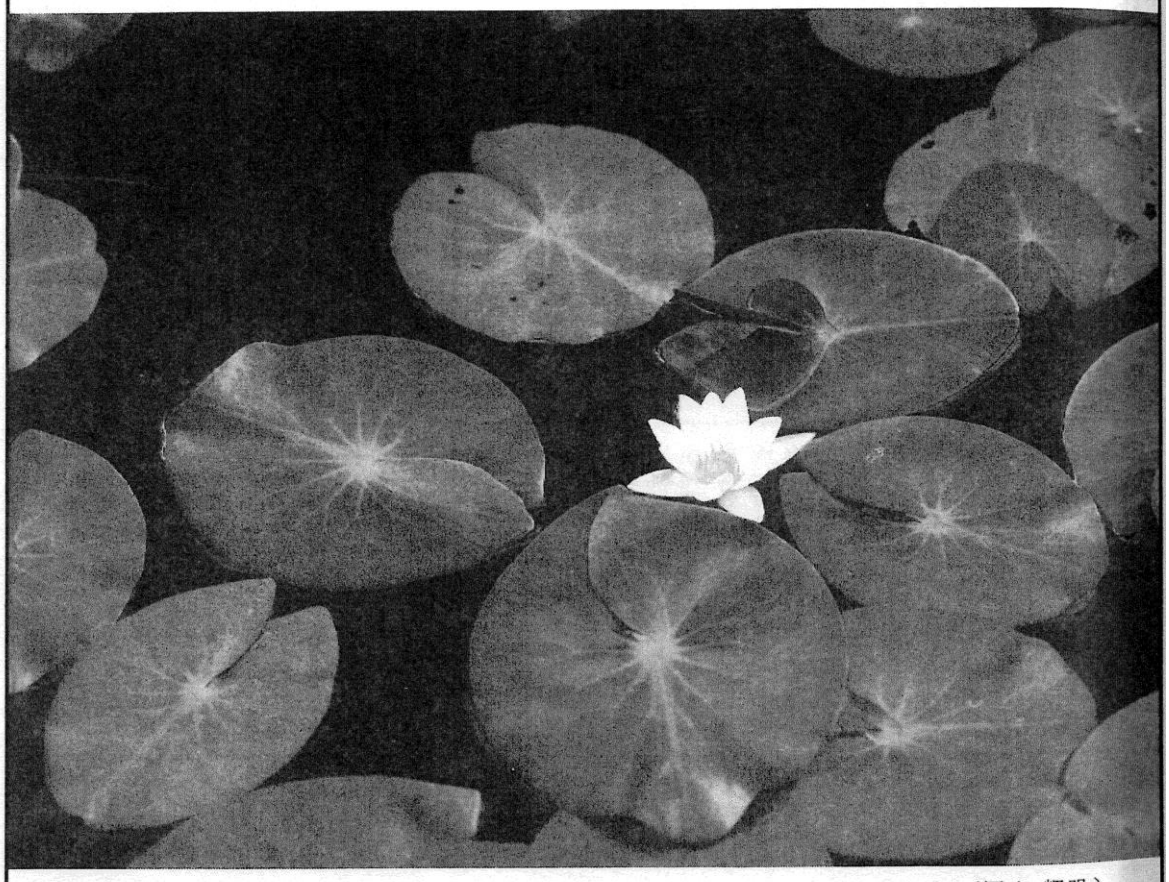
尾瀬の自然

第46号　1988－4

発行　昭和63年4月15日

（題字　初代環境庁長官　大石 武一氏）



ヒツジグサ（河内 輝明）

尾瀬の自然を守る会

アヤメ平は、よみがえるか？

―菊地慶四郎氏、前橋で講演―

この一月二十四日、尾瀬の自然を守る会群馬支部は、前橋市中央公民館で室内例会を開いた。

群馬県尾瀬保護専門委員である菊地慶四郎氏（県立武尊高校教諭）を講師として招いて「アヤメ平における移植による裸地回復―移植二十年目の結果」というテーマで講演していただいた。以下は、その講演の要旨です。

（文責、編集部・上野）

講演する菊地慶四郎氏

いま、なぜ尾瀬なのか。

私は、こんなふうに考えています。尾瀬というところはとてもきれいな美しいところである。しかし、私としてはその景観より尾瀬の植物、動物が重要なのだと考えております。

高等学校の教科書に自然林と人工林ということが書いてある。植林された森林では、杉・松等に樹種が単一化され、下草も限られている。それに対して、ブナ林に代表される自然林は植物の種類が多く、動物・昆虫等も豊富に生活している。ブナ林は遺伝子の宝庫と言える。尾瀬は、多岐の部分が一ヵ所にまとめられた場所である。たとえば、至仏山は、蛇紋岩からできており、特有の植物が分布している。燧ヶ岳は安山岩からできており、これも特殊な環境を形成している。ブナ等からなる落葉広葉樹林帯と針葉樹林帯の両方をもっている。また、尾瀬ヶ原は森林と違った植物群落をつくっている。特に、オゼコウホネ、オゼヌマアザミ、オゼヌマタイゲキなど「オゼ」の名がつけられた植物があり、それぞれ特有の遺伝子をもっている。もし、尾瀬が荒らされてしまったら、これらの貴重な遺伝子が消えてしまうことになる。

尾瀬のおいたち

周辺の山々について、地層を調べると景鶴山が一番古い。この山は化石の分析によって二億二千万年前の秩父古生層からできていることが明らかになっている。これは、日本列島が海から隆起してきた時期にあたる。そのあと、至仏山が一億七千万年前に出てきた。中生代に入って皿伏山、アヤメ平等の楯状火山があちこちにできた。最後に、十数万年～数万年前に燧ヶ岳が爆発して熔岩が只見川の渓谷をせき止めて古尾瀬ヶ原湖ができた。

尾瀬ヶ原の生成について、今まで昭和二十三年の学術調査の報告により「湿性遷移」によっているのだとされてきた。すなわち、湖が回りからの砂れきがたまって浅くなると、周辺からヨシ、フトイのような水生植物が入ってくる。これが枯れても腐らずに泥炭の形でつもり埋まってくる。ヌマガヤ、ヨシ、オオカサスゲ、ミズバショウ等からなる低層湿原となる。植物は、炭素・水素・酸素から成り、これが常温では腐って二酸化炭素と水になる。尾瀬のように標高が高くて寒いと、有機酸が発生し、この変化が途中で止まってしまう。そのため弱酸性で貧栄養の状態になりミズゴケが育つ。雨水の浸透は中央部が少なく酸性が高いため、ミズゴケがよく育つ。そのため中央部が厚い高層湿原となった、というものである。最近、これと異なる考え方が発表されている。群馬大学の木崎先生がボーリング調査を行って五～六年前に文部省から公表された。それによると、浅い湖が砂れきで埋まって湿地帯になったという。そこに川が何本か流れていた。大雨による洪水で土砂が運ばれてきて自然堤防ができた。その後方の水はけの悪いところに後背湿地ができた。中田代など、盛り上がっているのは基盤が上がっているのである。

また、指紋を押したように波を打ったような池塘があるのは、植物の遺体が切れて、雪どけのときなどにゆるやかな斜面上に波紋上にたまって、そこに植物が生えたものである、としている。

尾瀬の緑化

昭和四十一年に文化庁が、特別記念物が荒れるので、なんとかしなければならん、ということで予算が付いた。それで四十一年度から、群馬県が出先機関になって保護事業に当たり始めたわけです。

山ノ鼻の保護センターが、国と県が半分づつお金を出して四十一、二年にできた。文化財ですから、群馬県教育委員会社会教育課が担当していたわけです。

私が、四十一年にアヤメ平を見たときには、もう禿げ坊主でした。

尾瀬に本当に人が入ってくるようになったのは、昭和三十年代というふうに、データはありませんが、言われております。江間章子さんの「夏の思い出」がラジオ歌謡として放送されたのは、昭和二十七年だそうです。

終戦後、私は小学校、中学校時代ですが、東京におりま

してひもじい思いをいたしました。その私の経験からいって昭和二十年代には、なかなか尾瀬に入るゆとりがなかったのではないかと思います。

三十年代になって、どっと入ってきて、尾瀬ヶ原やアヤメ平を自由に踏み歩いた。スライドなどで見ますと、キャッチボールやバトミントンなどをやっている。そんな状態だったと思います。

昭和四十一年に群大の堀先生と、どのくらい痛んでいるだろうかということで、調べて報告させていただいた。（後掲「資料1」）

現在では、至仏山の裸地化が問題になっている。山ノ鼻からの直登する道がひどい。幅の広いところは、百メートルくらいになっている。小至仏を巻くルートも容易でない。そのことは「尾瀬の保護」第10号に報告をしています。

裸地回復事業

二つの方法を試みました。ひとつは、種を蒔いてグランドみたいになっているところを緑に復元しよう、というふうに試みた。（「資料2」）

播種による回復では、外部から種を持ち込まないで、尾瀬に生えている植物から種を集めた。比較的種を集めやすいミタケスゲ、ヤチカワズスゲ、ワタスゲ等について試みたが、ミタケスゲが一番能率が良い。雪どけのたびに泥炭が二～三センチメートルの厚さで流れ出てしまうので、倒木を置いたり、むしろをかぶせたりして流出を防いだ。

移植による回復では、裸地に被覆率三〇～三五パーセントの植物群落を移植して、被覆率八〇パーセントまで回復するのに二〇年間かかった。アヤメ平の裸地全体を回復させる場合、移植群落は裸地に対し一〇パーセント程度であるので、まだ数十年の年月を必要とすると思われる。ヌマガヤ－ミタケスゲ群落を移植して、自然遷移を待つのが良いと思う。ミズゴケを直接植えてもうまくいかない。

尾瀬ヶ原で見ていると、湿原に一人入って足あとができると、次々と入っていく傾向ができて裸地化してしまうようだ。雪どけの時期、植物の芽生えのときに踏まれると致命的である。至仏山で言えば小至仏の雪田などがこれにあたる。播種に使うミタケスゲは荒れているところとの境界に生える植物である。尾瀬ヶ原は回復してきたので、種がとれなくなっている。キンコウカ、チングルマのように横に根の広がる種類を代用したい。（「資料3」）

今日の問題

二つだけ取り上げます。一つは過剰利用の問題です。私は、マイカーの規制をしなければいけないと思います。

いま鳩待峠まで車が入っていますが、津奈木沢まで降ろさなければいけない。地元の人たちは「だめだい先生。群馬県が降ろしたって、福島県が沼山峠まで入っているからだめだい。」県の人に言うと行政と行政というのは、なかなかうまくいかないようですね。しかし、群馬側は津奈木沢、福島側は御池までに早急に規制すべきです。

一番おもしろくないのは、旅行業者が夜行で連れてくるグループ、ワッペン・グループです。新宿に夜十時ごろ集まり、ワッと朝来て日帰りで帰っていくわけです。この連中が悪いことをしている。

水問題については、この冬雪の量が少ないので、夏には水問題が再燃するのではないかと思います。

尾瀬ヶ原が水没するというようなことはないと思いますが、パイプを通して水を抜いたりすると、水量が変化して植物・動物に悪影響を与えることになり問題がある。

★ 参考資料

1　堀　正一、菊地慶四郎論文「踏付けによる泥炭層の被害について」（群馬県教育委員会「尾瀬の保護2」所収 1959. 4. 30）

2　菊地慶四郎論文「踏み付けと富栄養化による湿原破壊」（「群馬評論」第十九号所収、1984. 7）

八頁へ

破壊進む尾瀬救え

前　橋

「尾瀬の自然を守る会群馬支部」（飯塚忠志支部長）の一月例会が二十四日、前橋市大手町二丁目の中央公民館視聴覚室で開かれ、県立武尊高校教諭で尾瀬保護専門委員の菊地慶四郎さん(56)＝沼田市坊新田町＝が、アヤメ平の裸地回復をめざした研究について講演した＝写真。尾瀬の湿原は三十年代、観光客に踏みつけられて裸地化、植物群落の破壊が進んだ。菊地さんは生物学の立場で、四十一年から県がアヤメ平で行ってきた湿原移植と種まきによる裸地回復事業を研究。この日は同会のメンバー約二十五人に、これまでの調査をまとめる形で話した。

「湿原が裸地化して乾けば、当然湿原の植物は繁殖できず、簡単に元には戻れない」とし、例えば移植も「周辺の荒れていない湿原からの移植だから、むやみに移植できない。調査場所はこの二十年間でほぼ回復したが、裸地全体の回復にはまだ数十年はかかる」と、話した。

菊地さんは、さらに尾瀬を取り巻く問題について触れ「過剰利用で、生活排水による湿原の富栄養化を生み、バランスを崩している」と強調。その上で「尾瀬は遺伝子の宝庫。回復のために研究、保護活動を進めたい」と結論づけた。

朝日＜群馬版＞1988年1月25日

尾瀬を守る懇話会・その後

経過

尾瀬を守る懇話会は、昭和六一年二月二八日に発足したが、そのことは本誌第三十九号において詳しく報じた。

第二回の会合は、四月三〇日に開かれ、入山制限などについて議論がなされた。

「入山口（関門）をどこに設けるか、入山料を取るか否か、財団をつくるか否か」などの意見続出、すぐには結論が出ず、大石武一氏の発案で、具体的な「尾瀬の保護についての提言」をまとめるべく、小委員会（門司正三小委員長）が結成された。そのメンバーは、次のとおりである。

門司正三（東大名誉教授）
大井道夫（国立公園協会）
岩槻邦男（東大植物園長）
須田敏男（山小屋組合長）
星　一彰（福島県）
斎藤　晋（群馬県）
中西準子（東大助手）
内海広重（守る会）
中根一郎（緑の地球基金）

計　九名

この小委員会は、次の日程で開催された。

第一回　七月二十二日
第二回　九月十日
第三回　十一月八日

この日、横浜国立大学環境科学研究センターの藤原一絵氏によるレクチャーがあり、尾瀬の湿原について学んだ。

年が変わって、昭和六十二年に入り、第三回全体会議が三月十七日に開催された。

「入山料金は、誰が取るのか。その根拠は。」などが、入山制限とのからみで議論された。そして、小委員会は、続いていく。

第四回　五月二十二日
第五回　八月十八日

この日は、東大工学部都市工学科の中西準子氏の調査研究一部報告があった。中西氏は、生命保険会社からの調査研究費を得て、尾瀬集水域内での汚水処理問題の研究に取り組んでいる。

山小屋の実情、関係者の意見など研究が進むにつれて、判断のむずかしい部分があるようだ。

この間、小委員会がまとめた「尾瀬の保護についての提言」は、何回も検討され修正が加えられた。門司先生や斎藤先生の非常な努力がにじんでいる。

昨年、十二月十九日第四回全体会議が開かれ、この「尾瀬の保護についての提言―案―」が提出され、結論が求められた。大方の結論は、ほぼ合意が得られつつあるが、提言のタイミングや実行機関として財団の発足など、最もむずかしい問題がある。

提言の内容については、まだ公表の段階ではないので、ここでは、尾瀬の自然を守る会として、何を主張したかについて触れておきたい。

当会の主張

一　当面の緊急対策

○　定期路線バス以外の車は戸倉、大清水、御池、津奈木、富士見下で止める。
○　キャンプ及び冬季入山の禁止
○　登山者の入浴を禁止。
○　至仏山頂から尾瀬ヶ原への登山道を閉鎖する。
○　湿原上の木道を外縁部へ移す。
○　戸倉と桧枝岐にビジターセンターを設置する。
○　レンジャーの増員。
○　公衆便所、山小屋からの汚水は、固形化してヘリコプターで搬出する。（パイプ案には反対である。）

二　近い将来の対策

○　特別保護地区を北は渋沢温泉・ブナ平、南は津奈木・一ノ瀬まで拡大する。
○　現在のビジターセンターは域外に移動又は廃止。
○　宿泊施設の域外移動。
○　尾瀬沼からの取水廃止。

などを挙げた。

「尾瀬の保護についての提言」の中には、このほかに次のような項目も含まれ、検討が加えられている。

○　植生の回復
○　観光宣伝の自粛
○　入山料
○　財団の設立
○　土地所有者等との覚書

などである。

尾瀬を守る懇話会も発足して満二年が経った。

また夏が巡ってきて、尾瀬の危機は深められる。提言を発表して世論を喚起し、首都圏に残る最後の自然をなんとか、現状維持したいものである。

★総会報告

二月二十八日（日）、昭和六十三年度の総会が開かれ、二十一名が集まった。

児玉芳郎氏の案内と観察指導を受けて、神宮内苑の森でのバードウォッチングを行った。内苑では、ツグミ、キジバト、外苑では、ハクセキレイ、コゲラ、マガモ、カルガモ、オンドリ、大サギなどを見た。内苑の清水の暖かさが印象に残った。

その後、渋谷まで歩いて、東電の電力館を見学した。ここで一部屋を借りて総会が開かれ、六十二年度の会計報告と六十三年の行事計画が配付され、承認された。

特に、今年は指導員養成講座が第十回となるため、指導員による入山指導に力を入れる方針。

会員の声

会員の皆さまの声を積極的にとり上げていく欄をつくりました。どうぞ編集部あてお手紙下さい。

――今回は、指導員の皆さんに、過去一年を振り返え新年度に向けてのご意見などを聞いてみました。

◇　鈴木　隆（第九期）

養成講座を受講し指導員となったわけですが、重い荷を背負ったと云う思いを最近思った。例えば尾瀬にて木道からはずれている人などを見た時のあのドキドキする心は、指導員にならなければ味わう必要はなかったのだ。しかし私は指導員をやめようなどとはまったく思わない。だれかがその思いをしてでも尾瀬を守らなくてはいけないのだから、私はづっと続けたいと思う。（相模原市）

◇　新田和宏（第九期）

尾瀬の夕べを発展拡大したかたちで、定例研究会を行い、尾瀬に対する認識を深めよ。そのさい、参加費として一人あたり五百円位徴収して、会の収入とする。尾瀬特別立法の法制化へ向けての圧力活動を行う。（横浜市）

◇　大窪久美子（第七期）

秋の至仏山研究観察会には是非参加したかったが、できなかったのが残念であり、反省しています。リゾート法という新しい「日本列島改造論」に環境庁が乗っからないとの旨も残念だった一年でしたが、私自身は夏に戸隠で日本自然保護協会のサブレンジャーをやったり、北海道の知床や大雪や釧路で自然保護に関わる人々に出会い、話しをし、また大きな自然を見ることができ、なかなか充実した一年でした。また、ネパールや中国へ行きエネルギー源として樹木や灌木を伐採しつくされている山々、貧しいけれど暖かい心をもった人々に出会うなど、私自身の人生観＝自然観の肥やしになるものと思えます。新年も積み重ねていきたいと思います。（大阪市）

◇　小林章男（第七期）

尾瀬の現状を訴える簡単なパンフレットをつくっていただき、指導員が活動する時にこのパンフレットで啓蒙を行なう方法はいかがでしょうか。と申しますのは、小生、昨年に何回か個人で尾瀬沼で活動をさせていただきましたが、説明するにも簡単なパンフレットがありますととても効果があると思われたからです。また、指導員としての質の向上をはかるための勉強会はいかがでしょうか。（栃木県）

◇　牛木一朗（第七期）

昨年は、行事への参加が少なかったので、今年はできるだけ参加する様務めたいことと一人でも多く、会員を増加させ会の力を強めたい。第9期の藤田さんのレポートの中で、『後世の人に伝えるものではなく、湿原と草花の孫とその形成に関与する環境を彼等の為に、残さねばならぬ』という一節がある。この言葉こそは、自然保護の基本精神ではないだろうかと新しい会員の新鮮な眼に考えさせられました。今までの会の考え方を顧みると、主観的に片寄りがちになり、客観的に見直すということがない様に思われます。具体的には、次の世代の人に残すという、人間中心的な考え方、マイカー規制を提言しながらマイカーでの活動が多いという矛盾。そして尾瀬一辺倒の発想や討議等があげられ、客観的に見直すことによって気付かなかった点が見えてくることもあるでしょうし、会をよりアピールする為には、相手の立場になって考えることも必要です。さらには、尾瀬という器の中から見た尾瀬ばかりではなく、日本の自然の中における尾瀬という広い視野で、保護問題を考えて行く必要があるのではないでしょうか。（中野区）

◇　山田鉱一（第七期）

新入会員名簿欄を会報「尾瀬の自然」に設けていただきたいと存じております。また、会員証の交付を検討していただきたい。とも考えております。例えば「会費の数年間をまとめて納入」を推進していただきたいです。（下田市）

◇　金子　進（第四期）

最近、尾瀬の事が新聞等に書かれる度に、胸の中で〝ああー又か〟と思う。問題が山積されているにもかかわらず、解決の糸口はあまりにも細い。自然保護は、尾瀬にかかわらず日本全土で最も必要とされる課題であろう。にもかかわらず、保護団体の熱意にも柳に風と受け流してしまう役所や行政の中に、何人のたよれる人達が居るのだろうか。そして、その人達を本当に信頼して良いのだろうかと思う。そう言う自分も、尾瀬への道は遠のくばかり、皆他の仲間にまかせきりの一年でした。変則勤務と忙しさに、病気以外には休みも取れない状態の中での一年、会の行事は土曜、日曜が多いが、私の勤務は、土、日が特に忙しい事が多いため、昨年はあまりと言うより、ほとんど出席出来ず、今年度は全部に参加は無理でも、何とか参加回数が多くなるよう、出来るかぎりの協力はしたいと思っている。（群馬県）

◇　高野　均（第一期）

遠い尾瀬と思いはしていたが、会津鬼怒川線が開通したので、東京より日帰り出来る様な有様で、今年実際に実施してみた。全くこの様では尾瀬の自然は破壊されるのは目にみえている。何とも、とどまるところを知らない開発ラッシュ、この会も一度実行してみては如何です。この様な開発が進むと、自然の破壊はとどまることを知らない。63年度は、この辺の事を研究されたらどうか。（群馬県）

水彩写生旅行

（四）

大下　藤次郎
（日本水彩画家）

尾瀬沼

『道具』迄は無事に着いた。宿の名は「よごや」と云ふ。暫らく休んでスケッチに出る。『道具』の地はかつて丸山先生や吉田先生も來られたことがあつて、頗る奇勝に富んで居る。『吹割れ』の如き實に雄大な景色である。一枚岩の川底が両方から迫つて來て間は深く落ち込み、両方の岩の上をサラ〳〵と流るゝ水は此處に落ちて瀧をなす、水煙は濛然と上る。両方の岸は數十丈の岩山で『日光』の『大谷川』『箱根』の溪流はとても比べものにならぬ。スケッチ一枚。それから『千歳橋』の下で三脚を据える。こゝは又『吹割』と違つて恰も『コロラド』の如き趣きがある、切ッた様な岩が數十丈の深さをなし、水は青く黒くインヂゴの如き色をなし渦を巻いて押す様に流れ下る、こゝに一條の鉄道が有つたならば、都の人は如何に喜ぶだらうと思つた。（直）

『吹割れ』は實に奇景である、そして極めて壯大である、この溪流に突出した二丈程の高さの岩がある、水の侵蝕で弓形をなしてゐる、頂上は廣き處で一尺程、狭い處は二三寸しかない、『吹割れ』の景色を畫くには是非此上からでなければ出來ぬ、初のうちは怖がつて、上を歩行くのさへ容易でなかつたが、いつか皆々此上で道具を展げ出した。

『千歳橋』の下數十丈、その水の渦をなしてゐる處の色は實に悽愴を極めたのである、『華嚴』も古い『幾間』も面白くない、厭世家はこゝへ來たらよからう。（鶴）

雨に降られて宿にもどる、火鉢に火を澤山盛つて來たのは不思議だと云つたら、先生に土地が高いから寒いのだと説明された。（直）

宿の部屋は天井が馬鹿に低い、鴨居とスレ〳〵で吾輩は大に警戒を要する。一枚の額がある、鴨居の上へかけることが出來ぬため天井へ打つけてあつた、寝ながら見るのに都合がよい。定さんの豆は更に二つ三つ殖へた。

隣室の婆さんの咳でよく眠れぬ。雨がバラ〳〵ふりて來た。（鶴）

七月十四日　晴　時々小雨あり

番に攻められて眠さむ、七時半出發。

事務局日誌　87・9～

9/5　幹事会・例会
26・27　至仏山研究観察会参加者・岸他15名、係・飯塚
10/3　幹事会・例会
20　尾瀬の自然　44号発行
24　奥鬼怒スーパー林道群馬側ルート工事現場の踏査。参加者・内海他13名。係飯塚
11/7　幹事会・例会
15　自然保護指導員養成講座・室内講座。（農大一高）講師：斎藤　晋教授（群馬県立女大）「尾瀬の新しい見方」受講生13名他出席
29　尾瀬周辺自然保護シンポジウム開催。（宇都宮大）○奥鬼怒スーパー林道（群馬側）及び尾瀬周辺の道路開発　飯塚　忠志○尾瀬沼の取水問題　波戸場　秀幸○至仏山登山道周辺の荒廃　坂井　崇浩
12/4　ジャピック計画、尾瀬分水に反対するシンポジウム実行委員会　青木
5　幹事会・例会
19　懇話会全体会議　内海・岸
87・1/9　例会・新年会
14　大石　武一氏を訪問（懇話会の件）内海・坂井
20　故平野長英氏葬場祭　岸・内海・飯塚他
24　講演会・群馬支部例会　講師：菊地　慶四郎教諭（県立武尊高校）「アヤメ平の回復作業20年」・前橋市公民館
30　門司　正三氏を訪問（懇話会の件）内海・坂井
2/2　緑の地球防衛基金事務局訪問　内海・青木
6　幹事会　新年度行事予定・会計報告他
12　水問題シンポジウム実行委員会　青木
28　63年総会（電力館）と明治神宮の森観察会。係児玉参加者21名

3/6～7　関越交通KK、尾瀬林業KKを訪問（夏の入山者現地指導の件等）岸・内海他
15　幹事会　指導員研修会（朝日小屋）、夏の入山者現地指導の件他

宿の亭主は『戸倉』迄は平ですと云つたが、何實際はソウでない、登つたり降つたり小山を幾つとなく越えたので昨日よりも却つて勞れた。途中一番困つたのは『戸倉』の宿まで行つてる筈の米が來だ『土出』に在ると云ふのだ、僕等はとても此の上荷物は背負へず、と云つて村の者は養蠶時なので一人も遊んでる者もなく、思案にくれたが『戸倉』の宿の親切によつて、あとからこゝ迄取りに來てくれた。（直）

晴れたり降つたりで、草が濡れてゐて休むことが出來ぬ。『沼田』から『戸倉』へ送らして置いた米はことによると『土出』にあるかも知れぬといはれて問合せることにした、それがため道も大ぶ損をする、米の運搬にも一方ならず心を勞した、道の兩側には二丈も三丈もある桑の大木がある、場處によつては夏子の盛りであるに、此邊ではまだ春の蠶が繭にならぬ、桑の木には『越後』から來た桑摘男が、枝にとまつて頻りに俗歌を謠ふてゐる。

清水を見つけて「懷中サイダー」を飲んだ、甘露とはこんな味をいふのであらう。（鷗）

路は『片品川』に沿ふてあつて、鷺も鳴けば、河鹿もなく、岩に碎ける水の音も聞える、三松橋『土出村』からは河原の近くを行くので石ごろ〳〵と足が痛い、一時には『戸倉』に着いた。

『戸倉』の宿は「たまき屋」と云ふ、一家そろつて親切者だが、蠅が多いのには實に閉口した。（直）

よくしたもので、茶菓子は籠へ入つてゐる、蠅よけには他に工風はあるまい。早速晝飯にありついた。『戸倉』邊の米はトテモ口には入れられない樣にきいたがさうでもなかつた。（鷗）

晝食をすますと夕立があつてゴロ〳〵と雷が鳴る、赤城君と僕は稍々ヘコタレ氣味。夕立は直ぐ止んだのでいざとスケッチに出かける。（直）

山道を十數町往つて寫生を始めた、途中で泰さんは背大將を一匹殺して頗る元氣だ、定さんが怖がるので傘杖の先へ吊して振り廻してゐた。（鷗）

麥が未だ畑にある、黃金なすと歌はれるのも都近くで、こゝでは光澤（ツヤ）のない橙色である。夕食は名物「そば」の御馳走。

宿は山里に似ず湯もよし便所も氣持がいゝ、明日は登山と思へば氣もそろに勇むのである、暫らくは音信が出來ぬと云ふので各々澤山の繪葉書をかく。（直）

蕎麥の味は中々よかつた。さて翌日の人足を宿へたのむ、果して人夫がないといふ、宿でもいろ〳〵都合して、兎に角沼の傍迄馬をやりませうといはれたので一同大安心をした。

ビデオ「尾瀬の自然」ー美しき遺産を守るためにー

このビデオテープは、日本テレビで放映された「尾瀬ドキュメント85、86」の番組を、加藤ディレクターが昨年当会のためにまとめてくれたものです。

アヤメ平の荒廃、至仏山の踏み荒らし、そのほか尾瀬全域に進行している自然破壊の現状を確かな映像で捉えています。また中西アナウンサーの柔らかなナレーションが、いま一度あなたを尾瀬に招きます。ぜひ一巻お手元に置いてください。

監修／尾瀬の自然を守る会
制作・著作／日本テレビ
（三〇分トラック）

定価　六八〇〇円（VHS・ベータ共）会では送料込み六〇〇〇円で扱っています。

申し込み先　会事務局へ（VHS・ベータの別を明記し、代金とも現金書留で申し込んでください。）

入会のおすすめ

「尾瀬の自然を守る会」は日本における自然保護運動の発祥地・原点である尾瀬において、自然保護を考え、学び、行動する〝市民の会〟です。昭和四十六年八月尾瀬を通る国際観光ルート沼田ー田島線建設反対運動の際に発足し、その後幾多の困難を経ながら、会員の努力によって運動が続けられております。

尾瀬を愛する皆さん、小さな力でも合せれば、一粒の雨滴が大河になるように大きな力となります。どうぞ、この運動にご参加下さい。そして、日本の自然を守り、いつまでも心豊かな人間生活を送ろうではありませんか。

会の活動　。会報「尾瀬の自然」を発行　。自然観察会　。自然保護指導員養成講座　。その他、自然保護に関する調査研究、講演会など。

入会の方法　。年会費（1月～12月）※会員二、〇〇〇円、学生会員（高・大学生）一、〇〇〇円を会の会計へ振替で、必要事項（職業・電話連絡先、新規・継続の別）を記入の上お納め下さい。

会の会計・松田美代子（〒260千葉市作草部八六四ー五〇三　電話〇四七二（51）九五八七）

振替番号・東京6-138023　尾瀬の自然を守る会

行事予定

◇ 4月の行事
29日（金）～30日（土）
「指導員研修と相互交流」
宝川温泉・朝日小屋
一泊二食付 2500 円程度
（詳細は後記）

◇ 5月～6月行事
懇話会提言が出れば「尾瀬の夕べ」を開催します。
「環境週間協賛行事」
（ゴミ持ち帰り運動、入山者指導）

◇ 7月の行事
22日（金）～28日（木）
片品村戸倉～鳩待峠
「入山者指導の実施」
一泊三食付1,500 円程度
定員一日10人延70人予定
※ 指導員は、早めに計画を立て、活動可能な日程を事務局に申し出てください。（詳細は別紙）

◇ 7月下旬～8月上旬
「団体入山引率指導」
全国修学旅行研究協会等

◇ 8月の行事
12日（金）～15日（月）
「第10回・尾瀬自然保護指導員養成講座・現地研修」を実施（募集中・別紙）

◇ 9月の行事
「研究観察会」を実施予定
（指導員対象、会員一般）

◇ 10月の行事
「観察会」を実施予定
（会員、一般対象）

◇ 11月の行事
「第10回指導員養成講座・公開室内講座の実施」
（現地研修の修了者及び会員、一般対象）

例会案内

場所　農大一高・生物教室
日時　原則として、毎月第一土曜日・午後3時30分から
5月7日
6月4日
7月2日
8月（7/22～28 の現地活動に振り替える。）
9月3日
10月8日（第2土曜日）
11月5日
12月3日（幹事会を兼ねる）

平野長英さん御逝去
一月十八日（八四才）
告別式　一月二十日
謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

会報の発行

（年4回）

◇ 47号
6月末日発行

◇ 48号
9月末日発行

◇ 49号
12月末日発行

◇ 50号
64年3月末日発行

原稿の締め切りは、発行月の前月末日です。どしどし編集部あて送ってください。

三頁下段より

3　菊地慶四郎レポート
「アヤメ平における移植による裸地回復調査報告第6報」
（群馬県観光課「尾瀬の自然保護」第十号所収、1987. 3）

尾瀬自然保護指導者研修会

自然観察や入山指導をおこなうための基礎知識や手法獲得のための指導研修会をおこないます。

今回の　宝川温泉・朝日小屋は水上からバスで四〇分ほど入った奥利根源流域に建てられている、ガス・電気・水道不完備の、本当の意味での文化的⁉な施設です。

尾瀬に本格的な観光シーズンが訪れる前に、一度全指導員で徹底した討論もしてみたいものです。七月の入山指導を成功させるためにも多くの指導員・幹事の参加を切望します。

日　時：63年4月29・30日（金・土）
（4/29 14時00分ころ朝日小屋に集合してほしい。）
場　所：群馬県利根郡水上町大字藤原字宝川楢平　朝日小屋
宝川温泉より直進（大きな門の前の道）徒歩20分、車5分
参加費：2500 円程度（宿泊・食費・燃料費）
持ちもの：観察用具、シュラフ、防寒具、ハイキング程度の装備、長グツ他
課題図書：堀正一著「尾瀬の湿原をさぐる」（築地書房）
同　「尾瀬」（講談社）
問い合わせ：児玉芳郎　TEL0473-58-2922

入会申し込み書　　年　月　日　　㊞

1年分会費2,000円を添えて申し込みます。（学生1,000円）

名　前（ふりがな）　　男　女

現住所
〒（　　）　　自宅電話　－　－
MTS　　年　月　日
勤務先　　電　話　－　－

㊟ この入会申込書は、前頁の会計あてお送り下さい。

発　行　尾瀬の自然を守る会
第46号
発行日　昭和63年4月15日
発行者　岸　好人
編　集　青木・水沼
竹田・上野
事務局　〒156 東京都世田谷区桜3－33－1
東京農業大学第一高等学校生物教室内
03－425－4481内43